

OB・OG 会長の挨拶

たかが英語、されど英語

第1期ゼミ長 白木 俊介

2021年9月から二度目のシンガポールに上陸しました。一度目は2015年からシンガポール国立大学のPart-time MBAに通学しながら、日中は現地企業で働く生活でした。今回はMBA卒業後から勤務するバイエル薬品のShort term assignment (STA)として1年間、派遣されています。昨年、APACのタスクフォースプロジェクトメンバーとして提案したプロジェクトが経営陣に承認され、そのプロジェクトを実行するというミッションが課せられています。

二度目のシンガポールは、一度目に比べれば、日常生活でも、仕事でも、余裕があります。それでも、いつまで経っても、課題として挙がってくるのは英語。MBAの受験を経て2年以上、海外にいたにも関わらず、まだ、英語に悩まされる自分に、ため息がでます。今回の滞在では「中国語の勉強でもできたらいいな」と思っていたのですが、まあ、甘かったですね。正直に思いますが「純ドメの自分の英語学習は、一生、終わりはないな。」と腹を括りました。

そんな状況下、ツイッターのタイムラインに流れてきたつぶやきに共感を覚えました。私自身、Modern Familyというドラマを見たことが

ないのですが、このGloriaという女性の気持ちはよくわかります。「日本語だったら、もっとうまくやれたのになあ」と思うことはよくあるし、世界に通用するスキルを持っている優秀な日本人は多いのに、単に英語が話せないだけで、グローバルで日本人が戦えないことに腹が立ちます。英語環境にいると「IQが2割くらい下がった感じ」とこのツイート主は言いますが、私はさらに3割も4割も下がった状態で、戦っている気がしています。

もちろん、初めてシンガポールに来た時よりは飛躍的に進歩していることは実感しています。しかし、プロジェクトメンバーの1人として、意見を言う立場だった昨年までとは違い、今回はプロジェクトリーダーとして会議の司会進行を行い、各国の担当者に業務依頼をして遂行を管理する必要があります。さほ



英語学習に関する Tweet

ど各国のマーケット状況も把握できていないのに、オーストラリア、タイ、韓国、中国、台湾などのカントリーヘッドとディスカッションをして内容をまとめたり、交渉したりすることも必要です。上司はスウェーデン人で、プロジェクトを行っている同僚はシンガポリアンです。来月には、アメリカからやってくるカナダ人が直属の上司となります。まだ、日本の業務の延長線上に私の担うプロジェクトがあるため、日本での実績が活かせ、日本チームからも情報が得られるので助かっていますが、まったく未経験の仕事であったとしたら、さらに大変だったでしょう。

上司からの期末評価でも、「英語によるリーダーシップの発揮を期待する」と厳しく評価されている通り、やはり、グローバルポジションを獲得していくためには、英語力はあったほうがいい。た

Shiraki-san has been continuing to take lead for promotion of digital not only in Marketing but also in Sales without change of his behavior).

Shiraki-san is a capable and competent individual, but he is expected to show more leadership and initiative in his STA position as digital marketing manager. The ability to conduct strong presentations in English and collaborate/partner with leaders/stakeholders in the other markets/regions is critical in his STA and this is a development area for Shiraki-san.

上司からの年度末のフィードバック。外資系では可視化された評価がされます。

だ、英語力だけではないことも確かです。相手を納得させて合意形成をしていく交渉力が必須ですし、そのためには、人種や国の文化に応じたコミュニケーションの重要性も感じます。

◆ 愚直に恥をかいた数だけ強くなれる

さて、ここまで読んで「なんだか、大変そうだなあ」と思った方もいるかと思いますが、意外と大丈夫です。まあ、ある程度、こうなることは想像していたし、この環境でどこまでできるか、試されているし、こうやってチャンスを掴んでいくしかないと思っています。いつも、OB・OG会のエッセイでは自分をさらけ出していますが、私が今まで言語習得で試行錯誤をして、もがき苦しんだ経験を紹介したいと思います。言語習得は、恥をかいて赤面した数だけ強くなれると思います。皆様の何かのヒントになれば幸いです。

発音とリスニングの苦勞

大学1年の時には商学部のスピーチコンテストに参加した際、岐阜県の片田舎にある私の実家の農園の話が慶應の都会人に受けて入賞することができたのですが、その後の会食の際には審査員に「発音をもっと頑張って」といわれる始末。その時は、入賞したことが嬉しくて、あまり、気にしていませんでしたが、発音ができないからリスニングもできないことを後で気づく。TOEFLのリスニングでは本当に苦戦しました。発音も愚直にディクテーション等で練習しましたが、今でも、苦戦しています。特に子供の頃、音楽や楽器に触れずに育ってきたので、音の区別がとても弱い。

愚直な単語暗記

30歳に差し掛かった頃、漠然と海外MBAに憧れ、TOEFLやIELTSの本を手取るのですが、結局、スコアを伸ばすためには、単語暗記から始める必要があると知ったときは呆然としました。「このつまらない暗記という作業をまた、愚直にするのか」と思いながら、週末に単語帳を作成し、会社への往復の電車の

中で、カバンに忍ばせた単語帳をめくっていました。最近なら、携帯アプリでいいのかもしれませんが、ちょうど、過渡期で何度も、単語リストの作成しなおしたことを覚えています。ただ、今でも、単語は課題の一つで、結局、英語と日本語を照合して頭に入れていたので、シチュエーションやニュアンスによる使い分けがわかりません。例えば、Patient, Tolerant とかざっくり同じく「忍耐」といった意味として覚えていたが、実はそうでない。結局は、会話の中での使い方の違いを知った時に覚え直すしかない。

顧客からの電話を恐れて、同僚を探す日々

シンガポールで仕事を始めた当初は、クライアントにメールを書くのさえ、時間がかかっていたことを覚えています。当時、日本人が経営するシンガポールの広告会社で働いていたが、クライアントから唐突に電話で「デザインの修正をしたい」と連絡があったときは、慌てふためいていた。電話で正確に修正箇所を理解するリスニング力などないので、すぐに担当デザイナーに空き時間を聞いて、電話会議をセット。クライアントとデザイナーで直接、やりとりしてもらってました。これでは、同



マリーナベイにて家族と（著者は右端）

僚から信頼など獲得できるはずもない。会話の中で出てくる「Opacity 70%（色の透明度 70%）」などのデザイン界限で使われる単語を聞いては、「いや、初めて聞いた...」という日々。電話会議の際に録音した音声を、週末に聞きなおして、その文字起こしながら、必死にクライアントの使う用語を覚えていました。その頃、シンガポールに来て、1年経っていましたが、会社と夜間の MBA の授業の往復しかしておらず、マーライオンがどこにいるかさえ、知らないまま、時が流れていました。

◆ Stay Hungry, Stay foolish

2005年に米スタンフォード大学の卒業式で卒業生に向けて「ハングリーであれ。愚か者であれ」とスピーチを行った頃、スティーブ・ジョブスは50歳でした。スティーブ・ジョブスも50歳にして、若者の時、誰しもが持っていた飢餓感を持ち続けることの難しさを感じていたのだと思います。私が50歳になるのももう少し先ですが、そう遠くはない未来です。30代までは飢餓感を持ち続け、愚直に恥をかいてチャレンジしてきました。はたして40代になった私は、ハングリーさを持ち続けられるのか。

Get out of your comfort zone!（あなたの安心領域から抜け出せ！）

MBAに入学した際に言われたこの言葉を50代のスウェーデン人の上司にも言われました。それは、私へのメッセージでもあり、彼自身のメッセージでもありました。彼は自ら APAC・Regional・Head のポジションから別事業部のトルコ、イラン地区 Country・head の道を選び家族を連れ、この4月にトルコに移り住みます。50代になっても、あえて険しい道を進む彼を応援するとともに、自分も、望んでしまえば、楽な環境に安住できる経験と年齢になったからこそ、あえて、困難な道を選び続けたいと思います。